

第 56 回 (2020 年度) 城戸奨励賞 選考経過および講評

I. 選考経過

選考委員長 大塚雄作

1. 選考対象となる論文

対象は、2020 年度の『教育心理学研究』(第 68 巻)に発表された論文のうち、著者(共著者を含む)が公刊時に 35 歳未満である論文である。また原則として、同一執筆者に対し重ねて授与することはしない。今年度は、5 論文が選考の対象となった。

2. 選考委員(敬称略)

大塚雄作(委員長)、伊藤亜矢子、稲垣 勉、江上園子、小塩真司、加藤健太郎、荻間澤勇人、工藤与志文、進藤聡彦、瀬尾美紀子、平野真理、深沢和彦、丸山広人、三島浩路、山口豊一

3. 選考方法

選考は「城戸奨励賞規程」および「城戸奨励賞論文選考細則」(いずれも学会ホームページに掲載)に基づいて行われた。

4. 選考結果

第 1 次選考において、10 委員より推薦が 1 論文、5 委員より推薦が 1 論文、4 委員より推薦が 1 論文、3 委員より推薦が 1 論文、2 委員より推薦が 1 論文あった。

細則により、2 名以上から推薦のあった 5 論文を第 2 次選考の対象とした。

第 2 次選考において、各委員が上記 5 論文の評定を行い、その結果の一覧表をもとに最終選考を行った。その結果、以下の 3 論文を受賞論文として最終的に決定した。

- ・山田真世論文(幼児における絵の表現調整の発達—他者とのミスコミュニケーション場面での検討、第 68 巻第 1 号、pp. 23-32)
- ・庭山和貴論文(中学校における教師の言語賞賛の増加が生徒指導上の問題発生率に及ぼす効果—学年規模のポジティブ行動支援による問題行動予防、第 68 巻第 1 号、pp. 79-93)
- ・澁谷拓巳論文(連続反応を対象とするベータ反応モデルの拡張と EM アルゴリズムによる母数推定、第 68 巻第 4 号、pp. 373-387)

II. 講 評

山田真世論文「幼児における絵の表現調整の発達—他者とのミスコミュニケーション場面での検討」

講評者 瀬尾美紀子

幼稚園を訪れると、園児が自分の描いた絵を紹介してくれることがある。「お芋ほりに行ったの?」などと尋ねると、「うん、そう。みんなで行ったよ!」と嬉しそうに答えてくれる。自ら描いた絵によって、自分の経験が他者に伝わった喜びが、笑顔となっているように思われる。

山田真世論文は、こうした絵の情報伝達機能を幼児がどのように理解していくかについて検討したものである。保育園児 68 名を対象とした描画課題調査を実施し、他者が子どもの意図と異なって解釈するミスコミュニケーションの後に、幼児は形を変えたり、要素を追加したり、色を変更するなど描画表現を調整することが示された。そして、誤信念課題を用いた測定により、他者の心的状態を理解している幼児の方が表現調整を行っていることが示された。

先行研究ではミスコミュニケーション後に表現調整を行う幼児と行わない幼児がいることは示されていたが、なぜそうした個人差が生じるかについての検討は行われていなかった。本研究では表現調整の認知プロセスを詳細に整理し、心の理論に関する先行研究を援用して他者の心的状態の理解が関連するという仮説を説得的に導き、実際に検証して仮説が支持された。表現調整がなぜ生じるかについて、価値ある知見を新たに得たことは、この研究領域に対する重要な貢献として高く評価できるだろう。

また、研究推進の方法についても優れていた。幼児を対象とした課題実施のために、綿密な準備と丁寧な実施がなされたことが論文の詳細な記述からうかがえた。表現調整の変化を捉えるための描画分析においても、変化の有無を判断する基準が明確に示されており妥当なものであった。そして、月齢の影響の検討とその影響を統制した統計分析が行われ、結果から適切に結論が導かれていた。これらの点から、幼児を対象とした発達研究の模範例の 1 つとなり得るように感じられた。

本研究で検討された表現調整行動は、コミュニケーション場面の表現力を構成する重要な要素の 1 つとも

考えられる。表現力の育成は、現代の教育における重要な課題の1つであるが、本研究の知見がどのように教育実践に貢献し得るのかについて、本学会の論文としてはやや物足りなさを感じた。受賞者のこれからの研究の発展と、そうした点の深まりに期待したい。

庭山和貴論文「中学校における教師の言語賞賛の増加が生徒指導上の問題発生率に及ぼす効果—学年規模のポジティブ行動支援による問題行動予防」

講評者 荻間澤勇人

本論文は、生徒指導上の問題行動の多さが課題である中学校の2年生を対象とし、教師の言語賞賛行動が生徒の望ましい行動（授業参加）を促進すること、また、校内人材（主幹教諭）による言語賞賛行動の自己報告にフィードバックする組織的支援が有効であることを実証したものである。教師の言語賞賛行動が小学生の授業参加を促進することはすでに報告されている。本論文は、中学生を対象とした点、また、学年単位の組織的支援が教師の言語賞賛行動と生徒の望ましい行動を促進することを示した点に価値がある。

本論文では、望ましい行動の促進によって問題行動を予防しようとするポジティブ行動支援（positive behavior support）の枠組みを用いて、学年組織による支援を教師と生徒に行った。また、教師の言語賞賛回数には各教師の介入前後の平均言語賞賛回数を比較して分析し、生徒の授業参加と生徒指導上の問題発生率には一事例実験デザインのABデザインを用いて分析した。ABデザインでは介入以外の要因の影響が考えられるため、生徒指導上の問題発生率については、同じ中学校の1・3年生を統制群として、学校行事や地域性等の影響を統制した。また、平均授業参加率については、Baseline Corrected Tau (Tarlow, 2017)を用いて分析した。このように十分に練られた研究デザインを用いており、論文中でも詳細かつ丁寧に記述されている。

本論文で示された教師が言語賞賛行動を増やすことが生徒の望ましい行動を促進するという知見や、校内人材の教師へのフィードバックが有効であるという知見は、教師の実感と一致しやすく、学校現場に取り入れやすいものである。一方で、筆者が述べるように、校内研修や校内人材を活かした組織的支援では、生徒への言語賞賛行動が増えない教師がいる。今後、各教師に合わせた支援の検討が必要であろう。また、本論文では生徒指導上の問題行動発生率等の校外に公開されることがないデータを用いた。教育委員会や学校と

適切に連携できたことが新たな知見の創出につながったと思われる。

本論文の知見が学校の取り組みを促進することを期待したい。

引用文献

Tarlow, K. R. (2017). An improved rank correlation effect size statistic for single-case designs: Baseline Corrected Tau. *Behavior Modification*, 41(4), 427-467. <https://doi.org/10.1177/0145445516676750>

澁谷拓巳論文「連続反応を対象とするベータ反応モデルの拡張とEM アルゴリズムによる母数推定」

講評者 伊藤亜矢子

今の気持ちを温度で自由に示してもらおう「心の温度計」。0点から100点までの連続量（スケール）を示して、例えば幸福度を好きな値で回答してもらおうスライダー方式の回答法。こうした自由度の高い回答方式は視覚的・直感的に回答しやすく、親しみやすい。近年はテスト場面でも記述式・論述式が求められているが、100点満点の論述式問題なら、採点データは0から100の任意の点数となる。このような、従来の5件法や正誤式等の離散データとは異なる連続量による観測変数について、本論文は既存のモデルを拡張して新たな項目反応モデルを提案したものである。具体的には、①モデルの提案と、②人工データによるシミュレーション、③大規模な学力テストから抽出された実データによるモデルフィットの検討を内容としている。

本論が評価された点は、第1に論理性である。統計の門外漢にも論旨を迫る丁寧かつ論理的な記述が多く、審査者から高く評価された。第2は、人口データによるシミュレーションを経て、多カテゴリー実データを用いてモデル検討を行う研究手法の手堅さである。

提案のモデルは、尤度ベースの比較ができず、従来の一般的な項目反応理論のモデルとの比較が難しい。また、データの特徴をより反映させるための等化手法や、項目・受検者適合度指標の開発など、実用までは遠い道のりらしい。そのため、実践への貢献度が低いのではないかという意見もあった。しかしこうした研究は、学校現場から遠いようであるが、冒頭のような心理教育や試験など、学校現場の新しい挑戦を刺激し、教育心理学の学校現場への貢献に繋がる地道な探求と評価できるのではないだろうか。若い学会員の挑戦が次代の学校現場への貢献に繋がると信じて応援します。